

青木川上流域の植物採集会

伊 藤 文 男

第119回例会は、昭和62年8月29日(土)30日(日)下伊那郡大鹿村は、青木川の上流域で行われた。参加者は当日の参加者も含めて、井波一雄、奥原弘人、古谷義人、小口好久、今井建樹、斉藤定実、平林陸男、卯之原慶助、馬場多久男、望月精一、元島清人、堀米富平、田中茂、道案内先達の小松隆明、下平洋雄、堤久、幹事の伊藤文男と尾曾清博の18名であった。今回の例会の主目的地は青木川上流域(標高1000m~2000m)の燕岩、天主岩で、どちらも巨大な石灰岩である。その岩壁には寒地遺存植物が多いと言われている。また遠山谷は南方系の植物も多く含み、そのフロラは豊富である。

29日の夕方、幹事役が大河原の白河屋に到着する頃には、三々五々集まった参加者はすでに道すがら集めた植物をお互いに見せあいながら情報交換を行っていた。多くの人が手にしていたのは小渋川流域一帯に分布を広げたフジウツギ科の帰化植物のフサフジウツギであった。フジウツギによく似るがフジウツギに見られる茎の翼を欠き、葉の裏面が白色であることが特徴であった。さらにこの植物は小渋川流域には相当数分布しているのだが、天竜川流域には全く分布しておらず、分布上も奇妙な植物である。大方の方が集まった頃、奥原先生より小泉先生と歩かれた昭和5年のリストを元に、明日の調査地の概略と希産種、分布異常種、和名不明種などの解説があり翌日の資料とした。入浴の後、夕食となった。自己紹介の後、自然と植物の話題に花が咲いた。また、今井先生からは貴重なスライドを見せていただいた。特に釜無川で見つかったヒメホテイランは今まで北海道と青森県にしか確認されておらず、長野県では最初の発見となる。さらに八ヶ岳でみつけられたリンドウはサンブクリンドウによく似ており本物とすると今まで南アルプス特産とされていたサンブクリンドウの分布域が八ヶ岳にまで広げられることになる。話はいつまでも尽きることなく、部屋へ戻ってからもしばらく続いた。

第2日目(8月30日)当日参加者と白河屋旅館で合流し旅館前で記念撮影をしたのち出発した。当初の予定では車の入らないところからは青木川の河原を歩く予定であったが諏訪営林署の元島さんののはからいで林道を通れることになった。途中林道の法面

にトウヤマアザミがあると、さっそく車が止まり奥原先生から説明があった。このトウヤマアザミは河原に多いフジアザミと林縁に多いアズマヤマアザミとの雑種で総包の突起が少ないことが特徴である。

本日第一の目的地である燕岩が斜め右下に見えるところで車を降り、徒歩となった。ここで奥原先生は足場が悪いということで林道を戻りながらの採集となった。また望月先生は帰路につかれた。最初は植林地の道があったがしばらくして林内に入ると獣道を歩くことになった。この辺りの植物は、ハリモミ、ヒノキ、カヤ、サワグルミ、イヌブナ、ツガ、コメツガ、ウラジロモミ、ツクバネソウ、ルイヨウショウマ、ミヤマヤブタバコ、オオヤマハコベ、クロモジ、ヤマグルマ、ヤマタイミンガサ、ヒカゲツツジなどであった。河原近くまで降りると、イチョウラン、イブキヌカボ、クリンユキフデ、メタカラコウ、タマガワホトトギス、イワアカバナ、コウシンヤマハッカ等がみられた。また製速紀要素のギンバイソウが下伊那を特徴づけるものとしてみられた。

河原へついてしばらく下ると燕岩の前に出た。見上げるような巨大な石灰岩であった。岩壁とその近くでみられる植物は、クロクモソウ、ダイモンジソウ、ヒメウツギ、イワギボウシ、フサザクラ、バイカツツジ、ホソエカエデ、ウスユキソウ、ミヤマモジズリ、クサボタン(白花)、イワシャジン、ホザキイチョウラン、イワセキショウ、ミツバペンケイソウ、クロイチゴ、シナノコザクラなどであった。またすぐ近くの石灰岩の岩には、この燕岩で発見されたというトヨグチイノデや希産種のツルデンダがみられた。これより一行は今回の主目的地である天主岩へ向かう。河原は何回か渡渉せねばならないため大きく巻き道を取ることで山側の斜面を登った。当地は中央構造線が通っており道ははっきりせず斜面は急で崩れやすく歩きにくかったが、一行はそんなことはものともせず道を進んだ。途中見られたものは、ホソバハナウド、ミヤマホウキアザミ、オオバショウマ、ジャコウソウなどであった。高木はミズナラ、ウラジロモミ、カツラ、バラモミ、シナノキ、シオジ、リュウブ、コメツガ、サワグルミなどがみられた。道はまったくの獣道で進行は時々阻まれ、道を捜しながら進んだ。しかし、タカネフタバ

ランや12頭もある大きなミヤマツチトリモチなどがみつめられると、交代で写真を撮ったり、コタニワタリ、クロカンバ、ミヤマノキシノブ、キンセイラン、マネキグサ等の希産種がみられるなど有意義なものだった。

目的の天主岩にはなかなか着かず時間もよくなったので山の斜面で昼食にした。再出発してしばらくし崩壊地を数回通るといよいよ前進できなくなった。時すでに3時近く、しかたなく目的地の天主岩はあきらめ帰路に着くこととなった。戻ることもできず沢へ降りた。さいわい30分ほどで沢へ着くことができ一同安心した。沢はサワグルミ林で、周囲にはキハダ、カツラ、ウラジロモミ、コメツガ、アオベンケイ、ウスバスミレ、ヤマヨツバムグラ、ジュウモンジシダなどがみられた。河原をしばらく歩き沢から林道めざしてブナ林の伐採道を登った。ミヤマタニタデ、ミヤマスミレがきれいに咲いており各自

のカメラに納められた。

しばらくすると林道に出る。林道沿いには割合植物が豊富であった。まず目についたのはアカイシコウゾリナであった。これはコウゾリナの変種で母種の葉が倒披針形であるのに対し本種は広線形で非常に細いのが特徴である。林道のわきに単一群落を作るところなどは母種の性質を受け継いでいると思われる。オクヤマコウモリは葉柄の基部が茎を抱き母種のコウモリソウと区別される。そのほかハンカイシオガマ、センジュガンピ、クロクモソウ、キツリフネ、フジアザミ、カイトカラコウ等がみられたがヤマハハコ、アキノキリンソウ、ヨツバヒヨドリは大きな群落を作りちょうど花盛りで非常にみごとであった。

5時30分には全員が車のところに戻ることができた。林道の始点まで戻り奥原先生を加え解散したときにはすでに暗くなりかけていた。

〔新刊紹介〕 里見信生・小牧 旻「石川県樹木誌図譜」 B 5 判, 483 頁。石川県林業試験場。昭和62年12月, 非売品。

昭和52年に刊行された石川県樹木誌の図譜ということで出版されたそうであるが、部分的な解剖図を伴う詳細な図と検索表によって、この図譜の部1冊でも樹木図譜として十分活用できる。石川県と書名は限定されても、竹・笹も含めて430種が載っていて、しかもチングルマ、ガンコウラン、ツガザクラのような高山帯に生育する小低木まで入っているので、長野県用の樹木図譜として利用させて戴いても不便を感じない。また、巻末には、上述の昭和52年の図譜発刊以降採集された標本の引用があって、この図譜をより価値の高いものになっている。標本の引用が無いと、他地域産の図でないか? など疑問が残るが、その点も含め信用できる。里見教授は本年3月金沢大学をご退官になったが、後輩のためにもいつまでもご壮健で活躍していただきたい。(H. T.)

〔新刊紹介〕 北海道林務部編「北限のブナ林」 A 5 判, 180 頁, 北海道林業改良普及協会, 1,500 円。

全国的にブナ原生林の保護が喧伝される今日、そのブナ林の実態、さらには天然林施業の方法についてはまだ不明である。日本のブナ林の成立過程、分布地域(過去の)もまだ確定していない。ここで興味ある一つの問題は、ブナ林の北限と、その地域の植生、環境状況である。実際に、ブナ林の北限は、北海道渡島半島の黒松内低地帯で、これより以北は針広混交林となっている。本書はそのブナ北限地を

管轄する倶知安営林署のスタッフが中心となって、この地域の植生や環境を調査し、それを東大北海道演習林長の渡辺元氏が集められたものである。内容は、北海道の森林の概要、北限界のブナ林の実態、成立要因(仮説を含む)、植生構造、植生生態、ブナ林の植生史、世界のブナとブナ林など、単に北限のブナ林にかぎらず、ブナ林の全てについて解説されており、日本のブナ林の実態を理解する上で、極めて貴重な資料となるものである。(K. T.)

〔植物ニュース〕 126. オオイタドリ *Reynoutria sachalinensis* (Fr. Schm.) Nakai

裏日本型分布のオオイタドリを東筑摩郡四賀村五常、北山分校跡下の道路のり面で見出した。(1987年5月27日)。1980年5月の調査では見られなかったもので、その後播種されたものであろう。草高は秋に約1m、花・実ともなかった。

また、南安曇郡穂高町中房谷、有明荘の裏駐車場の東側のり面にも生育する一株があった(1980年10月3日)。草高約1.2m、花・実もない。南安曇郡誌(1956)の目録にもオオイタドリが記載されているが詳細な分布は不明である。(横内文人)

127. シロバナサワギキョウ *Lobelia sessiliflora* Lamb. f. *leucatha* Hara

1983年横内氏が東筑で県下初採。その後、塩尻峠付近の湿原を調べたが見い出せなかった。1986年8月29日諏訪市守屋山の湿地でエンビセンノウ等とともに数本生じているのを確認した。(元島清人)